



生活やものづくりの学びNetニュース

巻頭言

生活教育の見直し

日本消費者教育学会会長

大藪 千穂（岐阜大学副学長）

昨年来、多くのモノの値段が上がりました。全てのモノやサービスの価格が上がっているわけではありませんが、電気・ガスのエネルギー関連や牛乳や調味料等の食品で上がっているものが多いので、物価上昇を実感する人が多かったと思います。

物価上昇にはいくつかの理由が考えられます。新型コロナウイルス感染症による経済の落ち込みから回復し、一気に海外での需要が拡大したのに供給が追いついていない、異常気象による食料不足の深刻化、ウクライナ侵攻によるエネルギー価格の高騰、円安などが大きく影響したと考えられます。

また日本の賃金が30年間ほぼ上がっていない、生産年齢人口が減っている、原材料やエネルギーを全面的に輸入に依存しているため、海外でのインフレがすぐに影響するなど、構造的な理由も考えられます。

物価の話題はメディアでもよく上がっていますが、どのように算定されているかを知らない人は多いようです。日本の消費者物価指数は、1864年にドイツ人のラスパイレスが考案したものを基本として現在も用いています。考え方は極めて単純で「ある基準となる年に家計で購入した種々の商品と、同じものを違う年に購入した場合を比較し、基準時に比し、いくら必要かを指数化」したものです。

用いている品目は支出の中で重要度が高く、総額の1万分の1以上である582品目で、5年に1度、品目を見直しています。2020年の改訂時には、食品ではシリアルが追加され、塩辛が廃止されました。

しかし学生に物価の話をして、実家暮らしの学生にはピンと来ないのには驚きました。話には聞いているけど、自分とは無関係と思い、好きなものを食べ、寒くなったら暖房をつけ、お風呂も好きな時に入る…という生活をしているようです。さすがに下宿の学生は、買い物の仕方や電気の使い方に気をつけていると言っていました…。つまり多くの学生は生活をしているようで、実は「考えて生活していない」と言えます。この理由には家庭教育が大きく影響していると思います。お金のことは子どもに心配させたくないのでは話をしていない家庭は多いようです。果たしてそれでいいのでしょうか。子どももいずれは自分で生活をする時が来ます。そこで困るのは当人です。学校教育も重要ですが、家庭での生活教育力が低くなっていると感じます。多くの商品やサービスによって生活は便利になっていますが、災害等が多い昨今、再度「生活する」ということを再考する必要があると感じます。

Contents

巻頭言 1
報告 「生活やものづくりの学びネットワーク 公開フォーラム ものづくり再発見」 2~6
事務局からのお知らせ 7
「2022年度 春の学習交流会」のご案内 8

報告

生活やものづくりの学びネットワーク 公開フォーラム

ものづくり教育再発見

報告 「生活やものづくりの学びネットワーク 公開フォーラム」ものづくり教育再発見

コーディネーター 堀内 かおる (横浜国立大学)
川邊 淳子 (北海道教育大学旭川校)

2022年9月25日(日)に、公開フォーラム「ものづくり教育再発見」がオンライン(ZOOM)で開催されました。引き続きコロナ禍の中で家庭科、技術・家庭科の特色でもある実践的・体験的活動が制限されてきた学校現場の状況を背景として、少ない授業時数の中で技能習得にかける時間を確保しながらの実践、またICT活用による個別最適な新たな学びの可能性が生まれるなど、ものづくり教育は新しい局面を迎えているといえるでしょう。

本フォーラムでは、家庭科、技術・家庭科の中で大きな位置を占めてきたものづくり教育について、コロナ禍における課題を浮かび上げらせ、改めて教育的意義の問い直しを図るべく、家庭科のお立場から鈴木明子先生(広島大学大学院教授)、技術科のお立場から鈴木賢治先生(新潟大学教育学部教授)をお迎えし、ものづくり教育についてご提案をいただきました。

お二人のご講演の後には、まず参加者の皆様でZoomのブレイクアウトルームでのグループワークを行いました。限られたお時間の中での話し合いとなりましたが、それを受けて、最後の全体でのパネルディスカッションとなりました。今回は、掲示板アプリPadletを活用して、参加者から寄せられた様々な質問・意見を画面共有で視聴しながらとなりました(図1)。質疑応答のやり取りの代わりに、ICTを活用して匿名で書き込める意見を募集したところ、たくさんコメントが集まり、短時間ながらも、ディスカッションを深めることができました。

特に、参加者の皆様からは、図2にも示しましたように、お二人の先生方のご提案をお聞きになられて、またご自身の経験から、授業時数が限られている中で、どのようにものづくり教育を行っていけばよいのか、さらに、改めてコロナ禍において問われるものづくり教育の真価についてなど、参加者の皆様からいただいた多くのご意見の中から、コーディネーターの方で選ばせていただき、ご提案者の鈴木明子先生と鈴木賢治先生に、家庭科と技術科の双方のお立場から、お考えをお尋ねする形となりました。

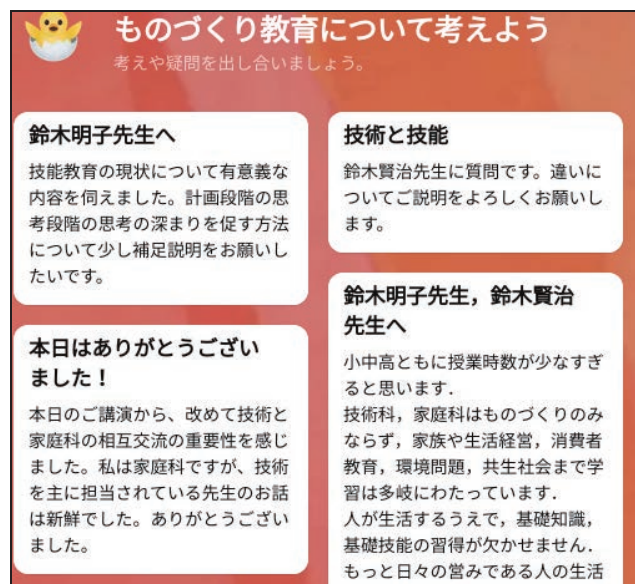


図1 Padletの入力画面

参加者の皆様から寄せられた感想からも、『技術と家庭科、両面からもの作りに関して聞けるのは良い機会だった。なぜ「モノづくり」が必要なのか、ということを再度考えることが出来た。ただ、やはり時間数が足りないことが教員の工夫だけでは限界があり、やらなければならないことは増える一方で、時間が減るという反比例の状況を何とか打開したいと感じた。』や『学生として参加させていただきましたが、現場の先生方と話す機会がない中、このような機会をつくってくださったことで、様々な視点からの意見を聞くことができ、とても良い経験となりました。充実したグループワークができ、さらに講演を聞くことで自分自身の新たな知識を積み重ねることができました。ありがとうございました。』と、今現在の足元を見ながらも、先を見通した中でもものづくりのあり方を問うていくことの大切さを皆様と共有でき、今後につながるものとなりました。

次ページ以降には、公開フォーラムでご提案していただいた鈴木明子先生と鈴木賢治先生から、当日ご提案していただいた内容を、再構成したものをご寄稿していただきました。

(文責：堀内 かおる・川邊 淳子)

ものづくり教育再発見

—家庭科における「布を用いた製作」の教育的意義—

鈴木 明子(広島大学大学院)

1. 日本の家庭科の現状と「布を用いた製作」の方向

現行学習指導要領(平成29年告示)では、①内容ベースから資質・能力ベースへの学力観の転換の中で、知識や技能の集積のみを求めるのではなく、それらを活用できる力が求められるようになった。また、②各教科の独自性を明確にするために「見方・考え方」が示され、家庭科では「生活の営みに係る見方・考え方」を活用して、教科目標に迫る学びを保障することが可能になった。さらに、③学びの過程を重視し、問題解決的文脈で思考力、判断力、表現力等を身に付けていくことによって、汎用的資質・能力の涵養にもつながる家庭科での学びを深めることが強調されている。

小・中・高等学校の教科目標には、共通して「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ」及び「実践的・体験的な学習活動を通して」という表記がみられる。このことから、家庭科における関連技能の習得は、生活事象の認識を深める方策であるとともに、技能習得にとどまらず、その意図を客観的に捉える媒介であることを示していることが分かる。対象となる技能は、生活自立の基礎となる衣食住の技能、生活の仕方やライフスタイル確立のための技能、乳幼児及び高齢者の生活支援に係る技能などである。

家庭科の「布を用いた製作」に焦点を当てると、社会生活や家庭生活の変化を背景として、時間数の問題や教科目標との関係において、その在り方が長年問われてきた。その学習を家庭科の資質・能力形成の一助とするために、教科目標に添った教育的意義を問い直し、何を製作学習の目的とするのか、何を基礎的・基本的技能ととらえるのかについて検討し、体系化・構造化することが必要であろう。

一方で、教科を超えたものづくり教育の意義を再考することも求められており、教育課程全体の中で、「布を用いた製作」の在り方を問う必要もある。「ものづくり教育は、単に作り手としてもものをつくる技術を習得するという観点からだけではなく、緻密さへのこだわりや忍耐強さ、ものの美しさを大切に感じる感性等を育てる上で重要である。」(中教審 2007)と述べられているように、「布を用いた製作」も「生きる力」や「確かな学力」に係るものづくり教育を担う学びの場でもある。さらに、教科連携、教科横断カリキュラムにおいて有効に位置づけることもできる。

2. 教育課程全体における「布を用いた製作」の意義

前項で述べたことを踏まえて、教育課程全体の中で「布を用いた製作」の意義を捉えてみる。資料1に示すように、石井(2020)は、育成すべき資質・能力に対応する教育目標・内容について、3側面から整理している。

資料1 育成すべき資質・能力に対応した教育目標・内容について

ア)教科等を横断する汎用的なスキル(コンピテンシー)等に関わるもの

①汎用的なスキル等としては、例えば、問題解決、論理的思考、コミュニケーション、意欲など

②メタ認知(自己調整や内省、批判的思考等を可能にするもの)

イ)教科等の本質に関わるもの(教科等ならではの見方・考え方など)

例:「エネルギーとは何か。電気とは何か。どのような性質を持っているのか」のような教科等の本質に関わる問いに答えるためのもの見方・考え方、処理や表現の方法など

ウ)教科等に固有の知識や個別スキルに関するもの

例:「乾電池」についての知識、「検流計」の使い方

出典:資料 石井(2020)

原典:育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—(平成26年3月)

家庭科の「布を用いた製作」について、その目標や内容を同様に3側面から捉えると、ウ)の教科固有の知識や個別スキルとしては、「布の性質の理解」、「布を縫合する原理」、「ものや身体を包む働き」の理解、「布の操作や縫製スキル」等が挙げられる。イ)の教科等の本質に関わるものとしては、「生活の営みに係る見方・考え方」の4視点を活用して、例えば、製作計画において快適性(機能性)や安全性を考えたり、教材(作るもの)やその素材を通して、生活文化や生活環境との関係を問うたり、使う人(自分、家族など)の生活課題をみつめたりすることがそれにあたる。「布を用いた製作」は、内容Bの学習でありながら、内容AやCの学習と関連して、教科目標でねらう態度形成につながっていく。ア)の教科等を横断する汎用的スキル(コンピテンシー)等に関わるものとしては、先述したとおり、教育課程全体の中で「生きる力」等の上位の資質・能力の形成を支え、教科連携や地域連携のための教材を扱う上で有効な学習活動として捉えることができる。一方で、このようなコンピテンシーベースの学校教育の展開の中で、家庭科という教科の本質を見失わないことも大切である。

3. 子供及び親の「布を用いた製作」への意識や実態

学校教育のものづくりに対する子供の好意度や有用感の調査(鈴木ら, 2012)や一般職業適性検査(GATB)結果の継続的分析(室山, 2013)等から、経験の少なさや形態知覚や空間判断力の低下に伴う手指の巧緻性や器

用度の低下も無視できない状況にあることが示唆されている。

学習意欲を高めるポートフォリオを家庭科製作学習に導入し、製作技能への自己評価及び自己効力感の変化を分析、検証した結果、学習後、技能の習得水準及びそれらを活用する力、さらに他者と協力する力に子供達の自己評価の高まりがみられた。また、自己効力感を構成する因子である「チャレンジ精神」及び「安心感」に学習前後で差がみられ、学習後の得点の増加がみられた(鈴木, 2013)。このことから「布を用いた製作」では、個々の子供の実態に応じてスモールステップで継続して技能を習得させる機会を設定することが有効であると考えられる。

さらに、小学 5, 6 年生保護者の衣生活の基礎技能に対する意識について調査し、子育て観別(学業重視, 生活重視 2 軸, 4 種)に検討した結果、子育て観の如何に関わらず、家庭で母親が子どもに教える頻度は低く、多くの母親は、ミシンの使い方、基礎縫い、ボタン付け等の基礎的衣生活技能の習得の機会を学校に期待していることが示唆された(梶山ら, 2016)。

4. フィンランドの手工教育から教育的意義を再考

工作・工芸教育の起源の国として知られるフィンランドは OECD によって行われた PISA の結果で義務教育の成果を上げた国として知られるようになった。そのクラフト科教育について 2007 年～2011 年に当国を訪問し、授業における学習指導実態や教員養成の実態を視察する機会を得た。また、2009 年にはフィンランド 3 大学の教員養成学部教授ら 4 名を日本に招き、小学校家庭科と中学校技術・家庭科のものづくり教育関連授業を観察してもらい、それに基づく評価報告を得た。

フィンランドの総合学校(第 1-9 学年)「クラフト科」の教育理念や目標は日本より焦点化されて示されている。また、「クラフト科の全体目標」と「第 5-9 学年の中心的目標及び共通する内容」が示された上で、各分野別の内容が、「計画過程」と「製作過程」のプロセス別に記されている。それに続く「第 9 学年終了時における生徒の達成基準の概要」、いわゆる「到達目標」も「計画過程」と「製作過程」別に、生徒が自己評価と学習プロセスの考察を具体的に行えるように示されている。「到達目標」の「計画」では製作過程に具体的イメージをもち、さらにそれを表現できることが求められている。それを可能にするために、構想や意欲保持のための思考や作業の速度やテンポが子供によって異なることを見取って指導を行っており、それが一人ひとりの主体的な学びの保障につながっていた。

フィンランドの専門家による授業評価から得られた示唆は、テクニック至上主義や完成品至上主義に陥らない工夫と、計画過程での思考が十分に深まるように授業を仕組むことの大切さであった。両国のカリキュラムや社会文化的背景が異なる中で、同じものづくり教育が効果的であるとは言及し難いが、フィンランドの学力観や指導観から学ぶことは多い。

5. 家庭科の本質から「布を用いた製作」の在り方を探る

家庭科という教科の本質や枠組みの中で「ものづくり」をどのように捉えるのかという課題とともに、教科を超えたものづくり教育の意義を論じた。ものづくりによる知の総合化の体験の中で子供達が自分の身体を通して布や道具と向き合うことによって、基礎的・基本的な技能習得も促されるという家庭科のものづくりの二つの側面を意識して指導に当たりたい。

参考・引用文献

- 1) 鈴木明子他「我が国の義務教育における『ものづくり教育』に対する学習者の意識(第一報)」日本教科教育学会誌 第 34 巻第 3 号, 11-20, 2011 「同(第二報)」日本教科教育学会誌第 34 巻第 4 号, 69-78, 2012
- 2) 室山晴美「中学生, 高校生の職業能力の変化—一般職業適性検査(GATB)による 11 年間のデータを用いて—」日本教育心理学会発表論文集(55), 2013
- 3) 鈴木明子「家庭科における製作学習に対する意識と自己効力感との関係—中学生の製作学習による変容」広島大学大学院教育学研究科紀要第二部 第 62 号, 321-329, 2013
- 4) 梶山曜子・鈴木明子「母親の子育て観と家庭科学習内容に対する意識との関係—小学校高学年児童の母親への質問紙調査の分析より—」日本家政学会誌 Vol. 67, No. 5, 266-275, 2016
- 5) 三根和浪・鈴木明子「フィンランドの教員養成における教育職能形成の実態—クラフト科教育の教員養成事例から—」日本教科教育学会誌 第 32 巻 第 1 号, 51-59, 2009
- 6) 科学研究費基盤研究 B 2008-2011 (課題番号 20330187) 我が国の小・中学校『ものづくり教育』再構築に関する研究報告書, 代表者: 若元, 分担者: 鈴木他, 2012
- 7) 鈴木明子「第 14 章 子供の学びを方向付ける直接体験」『生活実践と結ぶ家庭科教育の発展』福田他編, 大学教育出版, 2004



ものづくり教育再発見—技術教育の課題から

鈴木 賢治 (新潟大学教育学部)

1. 技術・家庭科教育の軽視の歴史

授業時数の変遷を見ると、職業科では140時間、技術・家庭科で105時間、70時間となり、現在は年間35時間、週1コマしかありません。

これに対して外国の技術教育のカリキュラムを見ると、表1のようになります¹⁾。日本以外では、初等から高等教育に至るまで技術教育を受ける権利が保証されています。それは、技術を学ぶことが、読み書きソロバンと同じように人権と理解しているからです。日本では、生産・生活を人の生きる基本として認識していない歴史的弱点があります。

2. 技術・家庭科教育の軽視の弊害と理科離れ

技術・家庭科教育の軽視により、週1コマになると、時数の少ない教科の教員の養成・採用も著しく抑制されます。その結果、図1のように免許外担任が増加します²⁾。

免許外担任の件数が技術・家庭科に著しく集中し、そのほか免許外担任に加え、時間講師や臨時免許状もあります。当然、授業指導も不十分な授業が広がり、生活の中に科学技術が生かされていることを知らない国民が形成されます。

表1 学校教育での技術教育の設定

国名(教科名)	学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
スウェーデン(手工科)		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
イギリス(技術科)		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	-	-
ロシア(技術科)		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	-
台湾(技術科)		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	-
ドイツ(州ごと)		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	-	-
米国(州ごと)		◇	◇	◇	◇	◇	●	●	●	○	○	◇	◇
フランス(技術科・他)		◁	◁	◁	●	●	●	●	●	●	○	○	○
韓国(技術科・産業科)		-	-	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○
日本(技術)		-	-	-	-	-	-	●	●	◇	-	-	-

● 必修、○ 選択必修、◇ 選択、◁ 他の教科と統合して実施

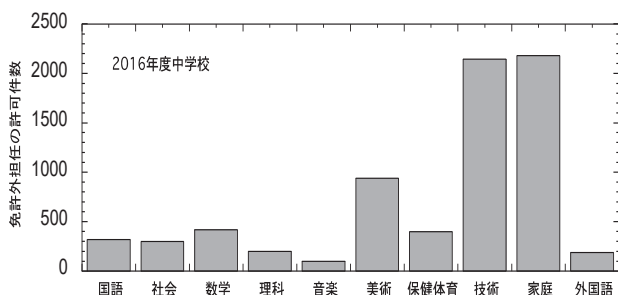


図1 中学校の免許外担任の許可件数

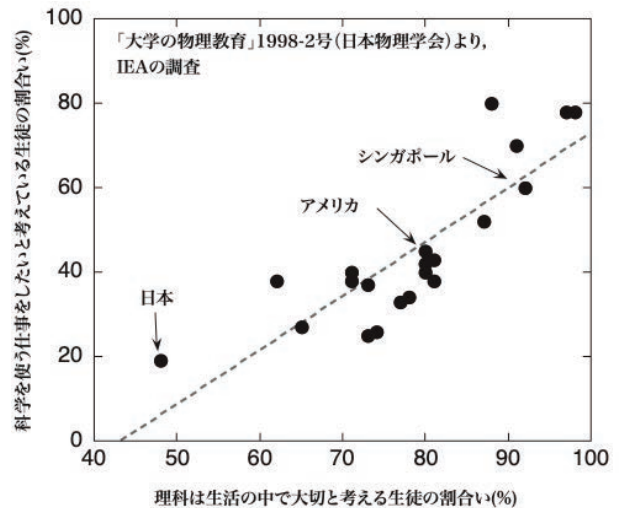


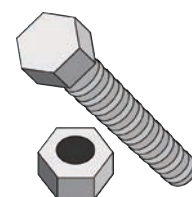
図2 生活と科学・技術の関わり

理科離れが社会問題になり、たくさんの予算が投入されても、改善されないまま放置されています。なぜそれが改善されないかを示すデータがあります。図2は「理科は生活の中で大切と考える生徒の割合」と「科学を使う仕事をしたい生徒の割合」の相関を調べています³⁾。生徒は、科学技術が生活に生かされていることを知り、科学・技術に関わる職業を選択します。ショックなのは、技術・家庭科が軽視されている日本は、図の左下に位置し、調査国の中で最も理科離れの国民となります。理科離れの根底に技術・家庭科の軽視があり、そこにメスを入れない限り改善はできません。

3. 生徒たちの教科観は意外と健全

しかしながら、生徒たちの教科観は健全です。中学生のアンケート調査⁴⁾を元にして図3を作成しました。ものづくり、家庭科、情報の科目に対して、生徒たちは好きな教科であり、かつ生きていく上で重要と考えています。図の右上(矢印)方向の学習は陶冶力が高いことを意味しています。技術・家庭科は生徒たちに好かれ、必要な教科と認識されているのに、十分な時数が用意されていないために、理科離れも起きています。左下の物理や化学を右上にするには、時間はかかりますが、技術・家庭科の時間を増やすことがきっと有効です。

これまでのように理念でなく、事実に基づいた科学的な教育課程の見直しが必要になっています。



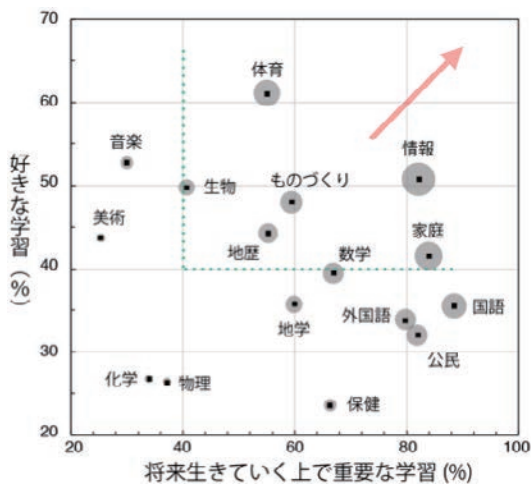


図3 学習内容についての意識調査

4. 技術・家庭科を学ぶ意義

表2に脳の体積を示します。ヒトの祖先であるアウストラロピテクスの脳はゴリラと同じですが、直立歩行して手を有し、旧石器の生活をしていました。ゆえに、ヒトの脳の体積が大きいのは進化の結果であり、原因ではありません。手に道具を持ち生産活動してきた労働の営みこそが、人類の進化の原動力です。これは技術・家庭科が陶冶価値を持つ教科であることの証拠です。また、歴史は、技術・家庭科の内容は社会発展の原動力であることも教えています。

しっかりした人間形成のためには、技術・家庭科教育の再認識が必要であり、技術・家庭科教育以外の教育関係者の意識改革が必要です。教科ごとの縦割りの活動の枠組みを越えた議論が必要です。

5. 技術・家庭科の特質を理解した教育方法

観点別評価では、興味・関心・意欲・態度が重視され、学校教育に長年にわたり浸透しました。その反動から一転してアクティブラーニングの重視が示されています。しかし、どうでしょうか。

表2 脳の体積

ゴリラ	チンパンジー	アウストラロピテクス	ヒト
600 cc	800 cc	600 cc	1500 cc

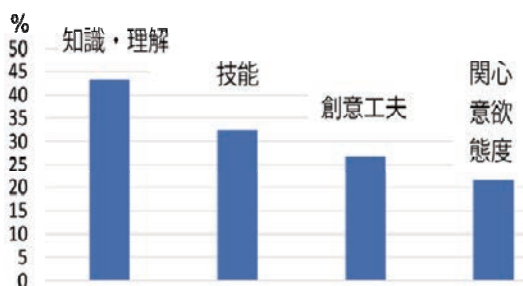


図4 技術の授業で達成されたことは?

技術・家庭科の授業は、ものづくりを通して学ぶ他の教科と異なった特徴があります。図4は技術科の授業を通じて、生徒が習得できたものをアンケート調査した結果です⁵⁾。技術では、関心・意欲・態度の評価では達成度が上がらず、観点別評価は学習効果が低いことを生徒自らが示したことになります。理解と技能を大切にした授業づくりが大切です。

紙面の都合で割愛したことも多いので、関係書籍をご覧いただければ幸いです^{6,7)}。

参考文献

- 1) 技術科教育のカリキュラムの改善に関する研究－歴史の変遷と国際比較、「教科等の構成と開発に関する調査研究」研究成果報告書(6), 国立教育政策研究所(2001).
- 2) https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/09/20/1409429_008_1.pdf
- 3) 風間晴子, 国際比較からみた日本の「知の営み」の危機, 大学の物理教育, Vol. 98, No. 2, pp. 4-16 (1998).
- 4) 理系文系進路選択に関わる意識調査－学校属性別集計結果の概要, p. 49, 国立教育政策研究所(2012).
- 5) 三山裕久, 向山玉雄, 「技術科」教育の社会的役割(2) 中学生の技術科意識の分析, 技術教室, No. 597, pp. 50-55 (2002).
- 6) 産業教育研究連盟編「技術・家庭科ものづくり大全－その教育理念と授業実践」合同出版(2021).
- 7) 鈴木賢治「技術教育学序説」合同出版(2011).



事務局からのお知らせ

1. 学習交流会等への活動補助費を支給しております。

本ネットワークでは、各都道府県での学習交流会・講演会・勉強会等の活動を支援しております。コロナ禍ではありますが、本年度も例年どおり活動補助費（1万円）を支給しております。希望される場合は事務局までお申し出ください。

2. メーリングリスト（ML）にメールアドレスを登録し、情報発信・交換等に活用ください。

MLを活用して、迅速な情報配信や交流をはかりたいと考えております。多くの皆様の登録・活用をお願いいたします。総会や学習交流会、各関連団体からの研修会等のご案内や会員同士の意見交換等並びに事務局からの連絡を行っています。ぜひご登録をお願いいたします。またMLに登録することで各種情報を添付ファイルをつけて配信することができます。情報の配信に不慣れな場合は、事務局にお知らせいただければ事務局から配信いたします。

MLへのメールアドレス登録及び変更は、事務局（seikatsu_nt@yahoo.co.jp）までお願いいたします。

MLアドレス：seikatsunetmail-ml.seikatsunet.com@ml.seikatsunet.com

3. 新版ビジュアルパンフレット（2019年4月版）を活用ください

新版ビジュアルパンフレットは、新学習指導要領への対応及び資料を更新するなど大幅な改定を行い、内容を充実させています。家庭科、技術・家庭科の学びの重要性を理解していただく資料として、すでに大学の授業や研究会、情宣活動等に活用いただいております。

パンフレットがご入用な方は事務局までご連絡ください。

- ・パンフレット代：無償
- ・送料：会員拡大用に使用する際は無料

大学等の授業で活用される場合は30部迄は無料、31部以上の場合は着払で送料をご負担いただきます。

なお、HPにパンフレットのデータが掲載されています。ご自由に印刷してお使いください。

4. ニュースレター送付先住所の変更について

勤務先の異動、引っ越し等でニュースレター送付先住所が変更になった場合はお早めに事務局までご連絡ください。なお、送付先は、原則自宅住所でお願いします。

5. 退会届の提出について

退会される場合は「退会届」の提出をお願いしております。ホームページに「退会届」の書式が掲載されておりますので、ご記入の上、メール添付か事務局への郵送でご提出ください。なお、年度ごとの退会となりますので、年会費をお納めの上、退会をお願いします。

事務局メールアドレス：seikatsu_nt@yahoo.co.jp

ホームページ URL：http://seikatsunet.g3.xrea.com/

会員継続のお願いと新規入会のお誘い

★本会は、2010年の設立以来、経験豊かな会員の方々から、これからの家庭科、技術・家庭科を担う若い会員の方々まで、会員の皆様に支えていただき今まで活動を継続してまいりました。これからも、皆様のお力添えをいただきながら、生活やものづくりの学びの意義と授業実践の成果を発信・共有してまいります。家庭科、技術・家庭科の今後の発展のためには、この教科の重要性について声をあげていく必要があります。入会届やリーフレット・パンフレット等はホームページからダウンロードできます。是非本ネットワークにご入会の上ご一緒に応援してまいりますよう、心よりお願い申し上げます。

世話人代表 堀内 かおる

生活やものづくりの学びネットワーク 春の学習交流会

ものづくり教育再発見 実践編

—小学校・中学校・高等学校の実践事例より—

参加費
無料

(事前申し込み)

[日時] ▶▶ 2023年 3月25日(土) 13:30~16:00

[実施方法] ▶▶ オンライン(Zoom)



● シンポジウム

- 「新しい時代を生きる子どもたちがものづくりに何を学ぶのか
—小学校の実践事例から—」
滋賀大学教職大学院教授(元京都市立高倉小学校長) 岸田 蘭子先生
- 「中学校技術・家庭科における藍の栽培と染色の授業実践」
北海道 空知郡 南富良野町立 南富良野中学校教諭 田澤 紫野先生
- 「ものづくりに興味・関心をもつ生徒に対する伴走支援の実際
—クリエイティブコンテストへの挑戦—」
広島大学大学院研究生(広島県立総合技術高等学校教諭) 白井 寛子先生

● パネルディスカッション

司会： 広島大学 教授 鈴木 明子先生
新潟大学 教授 鈴木 賢治先生



お問合せ



生活やものづくりの学びネットワーク事務局
E-mail : seikatsu_nt@yahoo.co.jp
Webサイト : <http://seikatsunet.g3.xrea.com/>

生活やものづくりの学びネットワーク

検索

お申込み

参加を希望される方は 3月19日(日)までに
以下のフォーム
(本ネットワークのWebサイトにも掲載)
<https://forms.gle/RxzmTm9Z2xFbw4ar9>
あるいは QRコードからお申し込み下さい。
参加方法は、後日ご案内します。

